



アスターの露地栽培

JA グループ和歌山農業振興センター 技術参与 本田 孝志

【はじめに】

アスターはキク科の一年草です。中国北部が原産で、比較的冷涼な気候を好みます。近年、品種改良が進み、様々な花色に加えて小輪から極大輪までバラエティー豊富な花となっています。

切り花は様々な利用方法がありますが、今回は仏花需要を中心にした露地栽培について紹介したいと思います。

八重咲きで黄色い芯はありません。いずれのシリーズも花色は赤色・白色・桃色・紫色など豊富です。



アスターはカラフルな花色が魅力

【作型】

播種後4か月程度で切り花ができます。気温が低いと播種から切り花までの日数が長くなり、ボリュームがアップします。逆に、高温下で栽培すると日数が短くなりボリュームがやや低下します。

7月咲きは平坦地での栽培が可能ですが、8月咲きは高温により立ち枯れ病が発生しやすいため、気温の低い中山間地域での栽培が適しています。

作型	3月	4月	5月	6月	7月	8月
7月咲	○	—	△	—	—	□
8月咲		○	—	△	—	□
		播種		定植		切り花

【育苗】

トンネルなどの雨除けを行い、30cm×40cm程度の育苗箱に約3mlの種を播き、薄く覆土をします。発芽適温は20℃前後で、播種後7日程度で発芽します。3月播種では50～60日、4月播種では30～40日で、本葉3～4枚の定植苗になります。育苗箱1枚で約400本の苗ができます。

なお、セル育苗では播種後の過湿により発芽率が低下することが多く、発芽まで過湿にならないように注意します。

【定植】

アスターは根が弱いので、排水性の良い圃場に定植します。また、セルカなどの石灰資材を施用し、土壌pHは6.5程度に調整します。

施肥量 (kg/107-ル)

	N : P : K
元肥 (定植前)	10 : 10 : 10
追肥 (定植2週間後)	6 : 6 : 6

【主要品種】

露地栽培では立ち枯れ病に強い品種を選定することがポイントです。代表的な品種としては「松本シリーズ」「くれないシリーズ」「あずみシリーズ」などがあります。松本シリーズとくれないシリーズは花の中心に黄色の芯があります。あずみシリーズは

土壌改良資材と元肥を施用した後、畝の上面80cm～100cm程度の畝を立てます。

12cm程度のフラワーネットを一段張った後に定植します。6条植えの場合は8目ネットの中央2条を空け、4条の場合は6目ネットの中央2条空けて定植するようにします。

【栽培管理】

定植後は50%遮光程度の寒冷紗で被覆して株が萎れるのを防止するとともに、2日に1回程度かん水を行って活着を促進します。1週間程度で活着するので、曇天日に寒冷紗を除去します。

活着は葉が横に大きくなりますが、1か月ほどすると茎が上方に伸長し始めます。茎の伸長に合わせてフラワーネットを上げます。2.5m間隔に支柱を立て、茎が倒れないように注意します。

肥料は、定植後20日頃、株間に追肥をします。さらに生育を見て、蕾が見えたころに液肥を1～2回施用すると品質が安定します。

蕾が見えた後、開花をそろえるため、最初に開花する天蕾は除去します。その後1～2輪開花時に切り花を行います。日中の高温時期を避けて株基から切り花を行い、切り花後はすみやかに水揚げを行います。



露地での開花状況

【病害虫防除】

病害では、育苗時に苗立枯病が発生することがあるので、発生初期にオーソサイド水和剤等で防除します。定植後、株が大きくなってから窒素が効きすぎて葉が大きい場合に灰色カビ病が発生することがあります。また、切り花直前にはさび病が発生することが多いので、適切な薬剤散布を行うようにして下さい。

害虫では定植直後にカブラヤガの幼虫に茎葉を切られることがあります。株が大きくなってからはオオタバコガなどの被害に注意して防除するようにしてください。

〔主な登録農薬〕

◆苗立枯病

オーソサイド水和剤 80 600倍

リゾレックス水和剤 500～1000倍

◆灰色カビ病

ゲッター水和剤 1000倍

◆さび病

ストロビーフロアブル 2000～3000倍

◆カブラヤガ

カルホス微粒剤F 6kg/10a

◆オオタバコガ

アフーム乳剤 1000倍

ディアナSC 2500～5000倍

※農薬容器に記載された使用時期や回数等を確認して使用してください

【まとめ】

○露地栽培では、松本シリーズなど立ち枯れ病に強い品種を選定しましょう

○連作は行わず、作付けは4～5年に1回の輪作にしましょう